

月例研修会（薬草の里）レポ

宇陀松山城跡・薬草の里散策

藤原 勲

梅雨の中休みか朝から曇り空で時々薄日のさす6月13日月例研修会が行われました。

午前9時に参加者22名を乗せた生駒交通バスが近鉄奈良駅前から出発しました。バスの中で配られた資料に目を通し隣に座った方と談笑している間に1時間で大宇陀道の駅の駐車場に到着。宇陀松山は大坂と伊勢を結ぶ交通の要衝でもあり、古くから城下町として栄え江戸時代には商家町へと発展していった場所です。その古い町並みが今でも生活の場としながらも景観を保ったまま残っている地として評価され、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

道の駅から舗装道路を歩いて行くとなだらかな坂になり、山道になる頃から急な上り坂になり30分程で着いたところが宇陀松山城（秋山城）の城跡です。宇陀松山城は松山地区の東にある古城山（標高473m）に有力国人秋山氏の本城（秋山城）として築かれ、少なくとも南北朝期には本拠を構えていたと推定されています。

豊臣秀長の大和郡山入部に伴い秋山氏は伊賀に追放され、豊臣家配下の諸将の居城となり、城と城下はこれらの大名によって大改修され名を「松山」と改めたと考えられます。奈良県内ではこの城のほか大和郡山城と高取城の三城体制で豊臣政権が大和国を支配していた事が分かり、宇陀松山城の持つ重要性が再認識され平成18



宇陀松山城の城跡で

年に国の史跡として指定を受け現在、調査・研究と保存整備事業が進められています。

次に向かったのは森野旧薬園で、現存する日本最古の私設薬草園で1729年に初代森野藤助通貞により創始され、徳川八代将軍吉宗が推進した薬種国産化政策の一端を担いました。通貞以降子孫代々藤助を名乗り、初代の志を継いで家業の葛粉製造と薬園の維持・拡充に努めてきました。明治以降の近代化によって伝統的な和漢薬が衰退し薬園が途絶する流れに抗し、旧薬園は森野家の努力により維持された稀有な存在であり1926年（大正15）国の史跡指定を受けています。また、植物分類学の父として知られる牧野富太郎氏と森野家との交流について自筆墨跡や遺された森野家芳名録、採集行動録からその足跡が見えます。資料館を出て小高い丘はならやまの観察路に似たよく整備された細い道で両側には薬草が次々と植えられています。案内の原野悦良氏の大きな声での説明に聞き入り、質問をしたり手を触れんばかりに薬草に見入っている人もおられます。山道の開けたところで全体の記念写真を撮り、昼食の予約時間が近づいてきたので薬園を後にしました。



森野旧薬園で観察

午後からは歴史的な建造物が残る町並みを散策した後、今日最後の訪問地の

万葉公園（かぎろひの丘）へ向かいました。宇陀は古来不老不死の妙薬と信じられていた水銀の産出地として知られており、この地で採れる薬草や獣を食べる事で聖なる力を持つと考えられた事から王権の獵場となっており、それが現代に続く「薬の町宇陀」の源流となっています。万葉集にみえる「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ」は柿本人麻呂が持統天皇の孫軽皇子がここ阿騎野の地に遊獵の際随行していた時に詠んだものです。

本日の行程はこれにて終了。お疲れ様でした。